



Title	ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読む 太宰治『黄金風景』を例に：英語・ヒンディー語・ウルドゥー語 / インド
Author(s)	モインウッディン, モハンマド
Citation	多言語翻訳：太宰治『黄金風景』. 2012, p. 55-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/32742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ワークショップ 異言語環境において日本近代小説を読む－太宰治『黄金風景』を例に－

英語、ヒンディー語、ウルドゥー語への翻訳を通じて感じたこと

- インドにおける日本近現代文学翻訳状況と合わせて -

M. モインウッディン

1、インドにおける日本近現代文学の翻訳状況

インドにおける日本の近現代文学の受容に関しては、まだ黎明期にあると言えるでしょう。とくに、翻訳に関しては、直接、日本語からインドの言語に訳された作品は、数えるほどしかありません。

また、インドへの翻訳状況を考える際に、注意しなければならないのは、インドは多言語社会であり、その言語は、単一ではないということです。すなわち、インドの言語と言った場合、ヒンディー語やウルドゥー語など、特定の言葉を指すわけではありません。現在、インド政府によって認められている言葉は、共通言語として英語のほか、ヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語、パンジャビ語、タミル語、マルヤラム (Malayalam) 語など、22 にのぼります。

さて、インドにおける翻訳に焦点を当ててみれば、1990 年以前の翻訳の多くは、英語からインドの複数の言語（とくにヒンディー語が多いです）に訳されたものであり、日本語から直接にインドの言葉に訳されたのは、主として 1990 年代以降のこととなります。ただし、1990 年以前にも、僅かではありますが、俳句や短歌の翻訳が見られます。それらの多くはヒンディー語やベンガル語に訳されています。

先ほど、1990 年代以降、日本語からの直接の翻訳が始まったと申し上げましたが、それも中国や韓国と比べてみれば、非常に少ないと思われます。国際日本文化研究センターから出版された『アジア新時代の南アジアにおける日本像：インド・SAARC 諸国における日本研究の現状と必要性』(2011 年)によれば、この時期においても、直接日本語から翻訳している翻訳者たちの数は、全体でわずか 9 人にしか達していません。

2、『黄金風景』翻訳を通じて

以上に述べたような現状の国から来た私にとりましては、本プロジェクトは非常に大きな意味があると感じており、自身が話すことのできる言語全てに翻訳できるよう、努力しているところです。

小説を単に一つのストーリーとして読むことと、その小説を分析し、研究論文を書くた

めに読むことと、それを翻訳するために読むことには大きな違いがあると思います。ストーリーとして読むことは言うまでもなく一番簡単なものであり、時として「なるほど」という気持ちとともに作品を読了する場合があります。また、論文を書くために読むことは、一番難しいことであり、先行研究には対象作品はどのように捉えられているのか、またそれらに対して自分がどう考えているか、さらに、自分の読みの独自性はどこにあるかを考えなければなりません。そして、自分の言語に翻訳するために読むと、やはり、両国の文化的な背景のほか言葉遣いなどについて深く考えないといけないと思います。

翻訳するために、『黄金風景』を読むと、そこに様々な困難があることが分かります。たとえば、タイトルの『黄金風景』の「風景」を訳すだけでも一苦労です。ヒンディー語では、「दृश्य」と訳しました。また、ウルドゥー語では「منظر」としました。両方とも〈自然界の眺め〉のような意味を表します。なお、英語で本作品を翻訳された Lane Dunlop 氏は、タイトルを〈The Golden Picture〉と訳されています。おそらくラスト・シーンにおいて、お慶たちが「絵のように美しく並んで立っていた」と記されていることを踏まえてのものと思われますが、私は、より中立的な〈A Golden Scene〉という表現を採用しました。

このほか、本文においては、〈お巡り〉や〈女中〉などの言葉、さらには、日本の伝統的な家の雰囲気を表す〈式台〉、そして〈泥の梅〉のような表現に直面し、翻訳に大変、骨が折れました。ぴったりとした言葉に訳すことは出来ないため、脚注においてその用語の説明を入れ、言い換えれば、ある意味で日本の文化を紹介する形になりました。やはり、文学を理解するためには、その文化を同時に理解しなければならないと思います。

例えば、「泥の海」や「式台」について言うと、実際に「泥の海」を見たこともない私はそのイメージは全く想像できませんでした。辞書の意味にしたがって訳したとしても、あまり海の近くに住まないヒンディー語のほとんどの読者たちにとってはこの言葉の意味を理解するのは非常に難しいと感じました。結局は、そのような読者に、大体のイメージを理解させるレベルの言葉に訳さざるを得ないということでしょう。

また、きわめて日本のものである「式台」という言葉の場合は、そもそも、この言葉を訳出するかどうかを迷いました。しかし、やはり、この言葉を説明しておかないといけないのではないかと考えました。そこで、〈式台〉そのものを対象言語の原稿に文字化して書く、あるいは、対象言語に存在する意味の近い言葉に翻訳して、その説明を脚注においてしておく、などの方法を考え、最もよいと思われるものを採用しました。

以上、簡単ですが、今回の翻訳作業を通じて、私の思ったことを申し述べました。この翻訳が、インドにおける日本文学研究にすこしでも貢献できるならば幸いです。